

岡山大学 Alumni (全学同窓会) グローバル人材育成事業
グローバル人材自己啓発奨励金事業 体験レポート

岡山大学理学部 3年 古川彩絢

National Model United Nations in Erfurt, Germany 2019 (2019.11.24~12.1)

はじめに

私は、今までに1年生のときに筑波大学で行われた筑波英語模擬国連(TEMUN 2018)にアフリカ西部に位置するウガンダの大使として、2年生の夏には神戸外国語大学で行われた日本大学模擬国連(JUEMUN 2019)に東ヨーロッパに位置するベラルーシの大使として英語模擬国連に参加してきました。今回のドイツでの模擬国連は初めて外国で開催される大会に参加するということもあり、従来、参加してきたものよりも圧倒的に日本人の比率が低下するため、今までの模擬国連参加の経験を活かしつつ、新たな挑戦をする素晴らしい機会となりました。

今までの経験と事前準備

積極的に発言しないために議論に参加できなかった今までの模擬国連での経験から、事前に自分の意見を持ち提案できる状態にしておくことの必要性を強く感じていました。一方で、自分から声を発せば、たとえ英語が流暢でなくともメンバーは自分の意見に耳を傾けてくれるということも理解していました。そこで、事前準備の段階ではただ国の事情や歴史を調べるのではなく、自分が本当にこの国の代表だったら、どのような主張をするのかということを意識的に考えるようにしていました。

今回の模擬国連で私は、セネガルの代表として、SDGs 実現のために核兵器の拡散防止と原子力の技術を効果的に使う方法についての議論をしました。アフリカの1国としてこの問題について議論するためには、アフリカの国々のほとんどがそもそも核を持つほどの経済的な余裕や科学技術をもたないという前提で議論をしていかなければならず、原子力を他のことに活用するための科学技術を有し、原子力発電所が各地にある日本の常識から外れることに難しさを感じました。その中で私はセネガルが、1)独立以来、紛争が1度も起きていないアフリカ大陸では稀にみる平和な国であること、2)旧宗主国であるフランスとの関係が良好で、核に関する技術支援を受けることが容易なことの2点からセネガルがアフリカ大陸における核のリスクと有効性に関する教育の拠点になることができると考え、今回の模擬国連では、まず、「核に関する教育を推進することの重要性」を国際的に認識させることを目指し臨みました。

実際にドイツでの模擬国連に参加して

模擬国連は大きく2種類の会議で構成されており、それぞれ Formal Meeting、Informal Meeting と呼ばれています。Formal Meeting ではその committee (委員会) に属するすべての delegates(大使)が参加し、全員が指定された席に着いた状態で行われます。その中で一人ずつが全員の前でスピーチを行い、自国の考えを主張します。Informal meeting では、さらに細分化された、似たような意見を持つ delegates でグループを作り、実際にどのような決議案を作成するかを話し合っていきます。以下では、この2つの meeting に分けて、私が体験したことについてまとめます。

1) Formal Meeting

Formal Meeting では一人が全員の前でスピーチをします。私は人前で話すのは得意な方ですが、ネイティブの参加者たちが流暢で難しい単語を使った“カッコいい”スピーチをする中で、だんだんと自分がスピーチをすることが怖くなっていきました。しかし、ドイツまで来たのに怖気づいて何もできなかつたら後悔すると思い、思い切って前に立ち、自分なりのスピーチをしました。何度も練習してきたはずなのに緊張で言い間違えてしまった部分もありましたが、何とかやり切ることができました。その結果、私の「核教育を推進したい」という思いを全員と共有することができ、その後の Informal meeting で同じ考えをもった複数の delegates に声を掛けられ議論をすることができました。自分の意見が周りに伝わったという達成感を感じることができました。

会議が進行するにつれて、私の中に全体で共有したい新たな考えが生まれたため、もう一度スピーチをするための準備を始めました。2回目以降のスピーチは、会議の展開に応じたものになるため、事前に準備する時間もほとんどなく、原稿の推敲もできないままスピーチに臨まなければなりません。さらには、自分に順番が回ってくるタイミングによっても内容を随時変更しなければならず、1回目のスピーチとは大違いです。この大変さから、日本で開催された模擬国連では2回目のスピーチをするのは英語が堪能で議題について知識の豊富な方ばかりで、日本人はほとんどいませんでした。私はこの2回目のスピーチに挑戦したいと思い、speakers list と呼ばれるスピーチ予定者の名簿に自分の国名を記入しました。名簿に国名を記入してから順番が回ってくるまでにかかなりのタイムラグがあることも珍しくなく、私の場合は決議案の最終議決の直前に順番が回ってきそうでドキドキしていました。実際、私のスピーチは最終議決の直前に回ってきたため、4日間の熱心な議論を行った仲間に対する感謝とねぎらいの言葉や、自分が所属するグループの決議案にぜひ賛成してほしいというお願い、今回の経験は参加者全員にとってかけがえのないものになるだろうという締め言葉までを自分の意見に加えて、ほとんどアドリブで話しました。今までの模擬国連参加の経験から慣例的に、決議直前の発表者はこのようなことを言う人が多いのは知っていましたが、まさか自分がその立場になるとは思っておらず、スピーチ直前までかなり焦っていましたが、何とかやり遂げ全員から拍手を頂いたときには

大きな手応えを感じました。

さらに Formal meeting ではスピーチに加えて Motion という発言機会があります。議会運営について質問があるときや、Formal meeting を中断して Informal Meeting に移行したいとき、昼休憩をとりたいときなどはすべて、挙手し“Motion”と言ってから要件を述べることで議会の進行に関わることができます。私は今回の模擬国連で Motion を 1 回以上することを目標としていました。実際には 4 日間の会議を通して 2 回の Motion をすることができ、そのうち 1 回は見学に来ていたドイツのシュタインマー大統領がいらっしやる中で声を挙げることができました。Motion は会議の進行具合をきちんと把握した上でないと、投票で否決されてしまいますが、私が行ったものはどちらも可決され、会議の進行に自分が関わっていることを実感でき、嬉しかったです。



↑ Formal meeting の様子

2) Informal Meeting

NMUN では Informal Meeting のグループ分けは事前に決まっておらず、周りの delegates たちと意見交換して、自分と似たような意見を持つ人を見つけなければなりません。このグループ作りは、NMUN 参加前から「もしどのグループにも入れなかったらどうしよう」などと思い、最も不安に思っていた部分でした。実際、グループ作りの時間になると全員が一斉に周りの人たちと大きな声で議論を始めました。最初は怖いと感じましたが、積極的に周りの人に声をかけ、自分の考えを伝えたり、相手の意見を聞いたりして自分の考えを深めたり、交渉をしたりしていくうちにだんだんと楽しくなっていきました。

た。意見が違う人とでも、なぜそう考えるのか、どういう点で自分と考えが異なるのかを議論の中で整理していく過程はとても面白く、今回の模擬国連で最も楽しかった瞬間となりました。

また、グループに分かれて決議案を作成している最中にも、Formal meeting での私のスピーチを聞いて他のグループから「あなたが興味を持つと思う提案があるんだけど、あなたの意見を聞きたい」と声をかけてくれた人もいて、自分の考えが相手に伝わりさらに深い議論につながっていくことに充実感を覚えました。



↑ working group のメンバー



↑ committee の集合写真

おわりに

NMUN では、今まで参加してきた国内の模擬国連とは異なり、半数以上がネイティブという環境で、非常に大変な面もありましたが、その中で積極的に議論に参加し、議会運営にも貢献できたことで、大きな自信となりました。私の専門分野は生物学であり、社会問題を議論する模擬国連は分野が離れていますが、大学生の今、専門分野に特化する前に自分の知見を広げるよい機会となりました。また、模擬国連で培った、英語で調べ、書き、議論する力は理系の専門分野でも必要不可欠な力であり、ぜひ今後活かしていきたいと考えています。

最後に、1年生で初めて参加した模擬国連から、今回のドイツ大会までの約1年間という長い期間にわたり、ご指導くださった Neil Cowie 先生にこの場を借りて心よりお礼を申し上げます。